

奨学金と幸福度



同志社大学商学部准教授 佐々木 一郎

～要旨～

本研究の目的は、全国の20～59歳男女を対象にしたWebアンケート調査データ3000サンプルを使用して、奨学金と幸福度との関連を分析することである。ロジット推定結果から、金額面でみた奨学金の借入金額の大小は幸福度には関連していないこと、むしろ、心理的にみた奨学金返済の負担感の重さが幸福度を低くするように顕著に関連していることが明らかになった。また、統計的に顕著ではないものの、在学時に奨学金を勉強・部活・就職活動でメリットを感じるように有効活用していた人々は、幸福度が高い傾向があった。奨学金と幸福度の因果関係の向きについて、2時点コホートデータ分析から明らかにすることについては、今後の研究課題である。

キーワード：奨学金、借入金額、返済負担感、有効活用、奨学金リテラシー教育の拡充

1 インTRODクシヨN

(1) 背景

現在、日本では、高校卒業生の約5割が大学に進学し、大学進学者のうち半数以上が奨学金制度を利用している（文部科学省[2016]、全国大学生生活協同組合連合会[2016]）。奨学金を借りる大学生は増加し、低収入等を理由に大学卒業後に奨学金を返済できない若者も増加してきている。平成27年度末で日本学生支援機構の奨学金を返済する必要がある者は約381万人、3か月以上の滞納者は約16万人である。正規雇用の割合は、奨学金滞納者は40.6%に対し、非滞納者は69.0%、年収300万円未満の割合は、奨学金滞納者は77.0%に対し、非滞納者は55.9%である（日

本学生支援機構[2015][2013]）。奨学金滞納者は、収入や雇用の面で厳しい状況におかれている。

アカデミックの世界では、小林[2012]や島[2011]などの代表的な研究をはじめ、進学格差や教育機会不平等などの視点から奨学金問題に多くの焦点が当てられているものの、医学や健康格差の視点から奨学金が個人の心身の健康面や幸福度にどのような影響を及ぼしているのかについては、定量的分析は少ない。

奨学金の借入は、進学機会・教育や生涯収入増加等を通じて健康・幸福度を高める側面と、借入・負債が心理的経済的負担等を通じて健康・幸福度を低くする側面の両面があり、正味の効果はデータから定量的に分析する必要がある。

表1 本研究の主な分析結果、インプリケーション

1	金額面でみた奨学金借入額の大小は、幸福度には関連していない。(借入額の大小ではなく、返済余力の大小が幸福度を左右する可能性)
2	心理面でみた奨学金返済負担感は、低い幸福度と顕著に関連している。幸福である確率は、奨学金の返済負担感がまったく重くない場合を基準とすると、返済負担感が非常に重い場合は、全サンプル N=3000 のケースで 0.37 倍に、奨学金借入者のみのサンプル N=573 のケースで 0.30 倍にまで落ち込む。
3	奨学金返済の負担感を特に重いと感じる割合は、50 代と比較して、20 代は 2.4 倍、30 代は 2.2 倍、既婚と比較して、離婚・死別は 2.7 倍、世帯年収 500 万円以上と比較して、300 万円未満は 3.9 倍、高くなる。
4	在学時に奨学金を勉学・部活・就活で有効活用できた場合、統計的に顕著ではないものの、幸福度は 1.2 ～ 1.5 倍、高い傾向がある。
5	幸福度を高める上で、在学時に奨学金をどう有効活用するかが重要と思われる。また、返済負担感が幸福度を顕著に低くする関連がみられたため、幸福度向上の点から、心理的な奨学金返済負担感の大きい個人、返済力の低い個人については、返済免除・軽減や猶予制度の拡充等が重要であると考えられる。

特に、医学的な視点からは、健康格差に関する代表的な先行研究である近藤 [2017]、近藤 [2016] などより、低収入や負債・借入は心身の健康に負の影響を及ぼすことが指摘されており、奨学金により多額の教育借入を負うことが、個人の精神的ストレス、心身の健康面に影響を及ぼすことが考えられる。幸福度や抑うつなどの心理的健康は、その後の重い身体的疾病や要介護・5 年生存率といったハードな健康アウトカムに顕著に影響することが知られており、健康指標の 1 つとしても重要である (Lawrence et al.[2015]、Sun et al.[2016])。

奨学金利用者数の増加、奨学金利用は経済面だけではなく健康格差にも影響することを示唆する先行研究などを踏まえると、奨学金が幸福度や心理的健康にどう影響するかを定量的に分析することは、重要な研究課題の 1 つであると考えられる。

(2) 奨学金と幸福度について先行研究で分かっていること

幸福度に影響する要因としては、経済学や社会疫学の研究から、社会経済的要因の影響に焦点を当てた研究が多く蓄積されている。高収入であ

ることは、高い幸福度と密接に関連していることが明らかになっている (Kye and Park[2014]、Oshio and Urakawa[2014]、Blanchflower and Oswald[2004])。Kye and Park[2014] は、韓国の 30 ～ 69 歳を対象とした調査データを用いた分析で、年間所得が 6 万ドル以上の高所得者は、年間所得が 2 万 4 千ドル未満の低所得者よりも、幸福度が高くなる確率が 2.31 倍であることを定量的に示している。また、Sun et al.[2016] や Zhou et al.[2015] などの研究から、教育年数が長いことは、高い幸福度と顕著に関連することが示されている。さらに、婚姻状況は、幸福度との関連が有意に関連することが明らかになっている (Ergin and Mandiracioglu[2015]、Sun et al.[2016])。Ergin and Mandiracioglu[2015] は、幸福でない確率は、既婚者と比べて、離別・別居の場合は、8.4 倍高いことを示している。

一方、借入や奨学金といった負債は、それ自体、社会経済的要因の一種である。しかし、社会経済的要因のうち収入や教育等と幸福度との関連は多くの焦点が当てられてきたが、負債と幸福・抑うつ等の心理的要因との関連については、相対的にみて研究の蓄積が少ないことが指摘されている。

負債と幸福度の関連についての先行研究としては、Tay et al.[2017] は、アメリカの大学卒業生を対象にした調査データを用いて、学生ローンが主観的幸福度に対して負の影響を及ぼすことを明らかにしている。また、同研究は、負債金額等の客観的な負債よりも、本人が負債に対して感じているストレスや不安や重荷などの主観的な負債のほうが、負債が幸福度や抑うつに及ぼす影響を分析するうえで、より実態を反映する可能性が高いことを指摘している。個人の所得や資産が大きい場合には、客観的な負債金額が大きいても負債が心理的健康に及ぼす影響は小さいことが考えられ、個人ごとの所得や資産の違いにより客観負債が幸福度や抑うつに及ぼす影響は一律には説明づけにくいことを理由としてあげている。さらに、Tsai et al.[2016] は、負債は幸福度と健康行動に対して負の効果を与えることを明らかにしている。

また、負債と抑うつに関する先行研究については、Hojman et al.[2016] は、縦断的なデータを用いることで、一時点の負債と抑うつに関連だけではなく、時間の経過に伴う負債の変化が抑うつに及ぼす効果を分析している。負債がある個人は、抑うつの傾向が統計的に顕著に高いこと、さらに、負債が少なくなると抑うつが軽減することを明らかにしている。Walsemann et al.[2015] の研究は、アメリカの若年者では、学生ローン借入額が大きいほど心理的機能が低下すること、親の経済力が高い場合よりも親の経済力が低い奨学金借入者のほうが奨学金借入による心理的機能低下へのダメージは小さいことを明らかにした。後者の結果が示された理由としては、親の経済力が低い家計ほど、奨学金がなければ大学進学への機会は少なく、奨学金による進学のメリット、自己効力感などへのプラス効果が大きく作用するためと推測している。

Sweet et al.[2013] は、家計負債が精神的健康に及ぼす効果を分析している。保有資産と比較して金融負債が高い場合、ストレスと抑うつが統計的に顕著に高いことを明らかにしている。

(3) 奨学金と幸福度について先行研究で十分に明らかになっていないこと

先行研究から、借入や奨学金等の負債が幸福度や心理的健康に対して統計的に顕著に悪影響を及ぼすことが明らかになってきている。一方、在学中の奨学金の有効活用と幸福度との関連については、これまでの先行研究では殆ど焦点が当てられていない。奨学金を有効活用することで、在学中に勉強、サークル、就職活動などに時間をより集中でき、そのことが卒業後の有利な就職機会や所得増大につながり、幸福度の増大につながることも考えられる。

また、収入や教育等の社会経済的要因と比較して、同じく社会経済的要因でありながら奨学金借入が幸福度に対してどう影響するかは、研究蓄積は相対的に少ないため、奨学金と幸福度に関する研究に焦点を当てること自体、重要な研究課題であると考えられる。わが国では、金銭面でみた奨学金の借入金額と幸福度との関連ではなく、心理面からみた奨学金の返済負担感と幸福度との関連を定量的に分析した研究は、非常に少ない。

(4) 本研究の目的

本研究の目的は、独自に収集した全国 Web アンケート調査データ 3,000 サンプルを用いて、奨学金の有効活用、および、返済負担感と幸福度との関連を分析することである。これまで焦点の当てられることの少なかった、奨学金の有効活用と返済負担感の2つに注目する。

2 方法

(1) データ

本研究は、横断的なデータを用いた研究である。分析で用いるデータは、筆者が独自に収集した Web 調査データである。調査は、2017 年 9 月に行った。筆者が調査票を作成し、外部の調査会社に調査を委託した。サンプルの収集基準は、日本全国の 20 ～ 59 歳の男女であること、学生ではないことである。収集したサンプル数、分析に使用するサンプル数は、ともに 3,000 である。表 2 に示されるように、性別は男女で 2 分類、年齢は 10 歳間隔で 4 分類、エリアは日本全体を北海道～九州・沖縄までで 8 分類し、総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（平成 29 年 1 月 1 日現在）」が算出した日本全体の人口比率の縮図となるように、3,000 サンプルを割り付けた。

(2) アウトカム変数—幸福度、奨学金返済負担感—

本研究の主なアウトカム変数は、幸福度である。副次的なアウトカム変数は、奨学金返済の家計負担感の重さである。

幸福度の測定尺度については、Krueger and Schkade[2008], Diener et al.[2010], Lee et al.[2016] 等の先行研究から、現在の全体的な幸福感を 1 項目でたずねる尺度が妥当性をもつことが明らかにされている。

本研究のベースとなるアンケート調査の質問項目では、Krueger and Schkade[2008], Diener et al.[2010], Lee et al.[2016] を参考にし、幸福度を測定するため、「全体的にみて、現在、あなたはどの程度幸せですか」とたずねている。回答選択肢は、「非常に幸せである」「やや幸せである」「あまり幸せではない」「全く幸せではない」の 4 つである。後述する統計分析では、アウトカム変数である幸福度は、「非常に幸せである」または

表 2 調査対象 3,000 サンプルの割付

		年 齢					
調 査 エ リ ア		20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	小 総 計	
1	北海道	男性	12	14	18	15	59
		女性	11	15	18	17	61
2	東北	男性	20	25	29	27	101
		女性	18	24	28	27	97
3	関東	男性	116	142	173	129	560
		女性	108	132	162	121	523
4	中部	男性	58	68	85	67	278
		女性	52	63	80	66	261
5	近畿	男性	51	58	76	58	243
		女性	50	59	77	60	246
6	中国	男性	17	20	25	20	82
		女性	16	20	25	21	82
7	四国	男性	8	10	13	11	42
		女性	8	10	13	11	42
8	九州	男性	33	41	45	40	159
		女性	33	41	47	43	164
	小 総 計		611	742	914	733	3,000

(注) 筆者が行った、全国 Web アンケート調査より。調査は 2017 年 9 月に実施した。日本全国の 20 ～ 59 歳の男女を調査対象とした。学生は調査対象から除外している。性別は男女で 2 分類、年齢は 10 歳間隔で 4 分類、エリアは日本全体を北海道～九州・沖縄までで 8 分類した。総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（平成 29 年 1 月 1 日現在）」が算出した日本全体の人口比率の縮図となるように、3,000 サンプルを割り付けた。

「やや幸せである」の場合は1、「あまり幸せではない」または「全く幸せではない」の場合は0とする2値変数とした。

また、奨学金返済の家計負担感の重さは、「奨学金の返済は、家計の経済的負担からみて、どのような状況ですか」とたずねている。「非常に重い」または「やや重い」と回答した場合は1、「あまり重くない」または「まったく重くない」と回答した場合は0として、2つの値をとる変数とした。

(3) 主要な予測因子—奨学金要因—

奨学金の提供主体には、都道府県等の自治体、企業や財団等による奨学金など、多彩な種類がある。これらのなかで、日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金は、貸付総額、利用者数の大半を占めていることから、本研究のアンケート調査や分析の対象とした奨学金項目は、すべて、日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金を指すこととした。本アンケート調査では、「あなたは、学生の時に、日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金を借りていましたか。」とたずね、「借りていた」と回答した場合は奨学金借入者、「借りていなかった」と回答した場合は奨学金非借入者に分類した。

さらに、奨学金を借りていたと回答したケースについて、奨学金要因として、奨学金のプラス項目とマイナス項目をたずねた。まず、奨学金のプラス項目は、学生のときに日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金を利用したことで、「学校」「サークル・部活動・課外活動」「就職活動」により多く専念できたかどうかについて、それぞれ、「あてはまる」または「ややあてはまる」の場合は「専念できた」、「あまりあてはまらない」または「あてはまらない」の場合は「専念できなかった」、奨学金を借りてい

なかった場合は「非借入者」に分類した。

次に、奨学金のマイナス項目は、奨学金の最初の借入総額、現在の借入残額であり、100万円未満、100-200万円未満、200-300万円未満、300万円以上に分類した。奨学金の返済は家計の経済的負担からみてどうかについては、非常に重い、やや重い、あまり重くない、まったく重くないの4つに分類した。

(4) 共変量

年齢は、10歳間隔ごとに、20～29歳、30～39歳、40～49歳、50～59歳に分類した。婚姻状況は、既婚、未婚、離別・死別に分類した。世帯年収は、300万円未満、300-500万円未満、500-700万円未満、700-1,000万円未満、1,000万円以上に分類した。教育は、中学校・高校卒、専修・専門学校・高専・短大卒、大学・大学院卒の3つに分類した。雇用形態は、正社員、非正規雇用・パート、自営業・会社経営、無職の4つに分類した。

(5) 統計分析

本研究では、奨学金要因と幸福度との関連、および奨学金返済負担感の影響要因を分析するため、ロジットモデルを用いた。幸福度および奨学金返済負担感について、オッズ比と95%信頼区間を算出した。主要なアウトカム変数である幸福度は、「非常に幸せである」または「やや幸せである」の場合は1、「あまり幸せではない」または「全く幸せではない」の場合は0とする2値変数とした。また、奨学金返済負担感は、「非常に重い」または「やや重い」の場合は1、「あまり重くない」または「まったく重くない」の場合は0とする2値変数とした。

以下の幸福度のロジット分析では、3つのモデルを用いて分析した。モデル1では、人口統計

表3 記述統計量 (N=3000)

	奨学金借入者		奨学金非借入者		全体	
	N=573	%	N=2427	%	N=3000	%
年齢 (平均年齢 (標準偏差))	35.3 歳 (SD=10.1)		41.9 歳 (SD=10.1)		40.7 歳 (SD=10.4)	
性別						
男性	327	57.1	1197	49.3	1524	50.8
女性	246	42.9	1230	50.7	1476	49.2
年齢						
20-29	223	38.9	388	16.0	611	20.4
30-39	160	27.9	582	24.0	742	24.7
40-49	120	20.9	794	32.7	914	30.5
50-59	70	12.2	663	27.3	733	24.4
婚姻状況						
既婚	290	50.6	1511	62.3	1801	60.0
未婚	263	45.9	746	30.7	1009	33.6
離婚	18	3.1	151	6.2	169	5.6
死別	2	0.3	19	0.8	21	0.7
世帯年収						
0 円 -300 万円未満	118	20.6	505	20.8	623	20.8
300-500 万円未満	181	31.6	644	26.5	825	27.5
500-700 万円未満	107	18.7	542	22.3	649	21.6
700-1000 万円未満	108	18.8	476	19.6	584	19.5
1000 万円以上	59	10.3	260	10.7	319	10.6
教育						
中学校・高校卒	70	12.2	816	33.6	886	29.5
専修専門学校・高専・短大卒	117	20.4	655	27.0	772	25.7
大学・大学院卒	386	67.4	956	39.4	1342	44.7
雇用形態						
正社員	328	57.2	1067	44.0	1395	46.5
非正規雇用	109	19.0	572	23.6	681	22.7
自営業・会社経営役員	24	4.2	212	8.7	236	7.9
無職	112	19.5	576	23.7	688	22.9
奨学金借入						
借りていた	573	100.0	0	0.0	573	19.1
借りていなかった	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金の種類						
第1種 (無利息)	297	51.8	0	0.0	297	9.9
第2種 (利息付)	227	39.6	0	0.0	227	7.6
両方	49	8.6	0	0.0	49	1.6
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金の返済状況						
返済中	277	48.3	0	0.0	277	9.2
滞納 (1 日以上～2 か月)	4	0.7	0	0.0	4	0.1
滞納 (3～9 か月)	5	0.9	0	0.0	5	0.2
滞納 (10 か月以上)	1	0.2	0	0.0	1	0.0
免除・猶予	34	5.9	0	0.0	34	1.1
全額返済済み	252	44.0	0	0.0	252	8.4
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金の最初の借入総額						
0 円～100 万円未満	102	17.8	0	0.0	102	3.4
100～200 万円未満	162	28.3	0	0.0	162	5.4
200～300 万円未満	169	29.5	0	0.0	169	5.6
300 万円以上	140	24.4	0	0.0	140	4.7
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金の現在の借入残額						
0 円～100 万円未満	407	71.0	0	0.0	407	13.6
100～200 万円未満	70	12.2	0	0.0	70	2.3
200～300 万円未満	54	9.4	0	0.0	54	1.8
300 万円以上	42	7.3	0	0.0	42	1.4
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9

表3 記述統計量 (N=3000) (続き)

	奨学金借入者		奨学金非借入者		全体	
	N=573	%	N=2427	%	N=3000	%
奨学金返済の家計負担感の重さ						
非常に重い	160	27.9	0	0.0	160	5.3
やや重い	225	39.3	0	0.0	225	7.5
あまり重くない	113	19.7	0	0.0	113	3.8
まったく重くない	75	13.1	0	0.0	75	2.5
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金のメリット (学校勉強に専念できた)						
あてはまる	127	22.2	0	0.0	127	4.2
ややあてはまる	265	46.2	0	0.0	265	8.8
あまりあてはまらない	133	23.2	0	0.0	133	4.4
あてはまらない	48	8.4	0	0.0	48	1.6
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金のメリット (サークル等に専念できた)						
あてはまる	88	15.4	0	0.0	88	2.9
ややあてはまる	191	33.3	0	0.0	191	6.4
あまりあてはまらない	180	31.4	0	0.0	180	6.0
あてはまらない	114	19.9	0	0.0	114	3.8
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
奨学金のメリット (就職活動に専念できた)						
あてはまる	72	12.6	0	0.0	72	2.4
ややあてはまる	187	32.6	0	0.0	187	6.2
あまりあてはまらない	206	36.0	0	0.0	206	6.9
あてはまらない	108	18.8	0	0.0	108	3.6
非借入者	0	0.0	2427	100.0	2427	80.9
幸福度						
非常に幸せである	90	15.7	355	14.6	445	14.8
やや幸せである	312	54.5	1298	53.5	1610	53.7
あまり幸せではない	137	23.9	564	23.2	701	23.4
全く幸せではない	34	5.9	210	8.7	244	8.1

的要因(性別、年齢、婚姻状況)、社会経済的要因(世帯年収、教育、雇用形態)、奨学金メリット(勉学、部活動等、就職活動が専念できた)、最初の奨学金借入総額を調整した。モデル2、モデル3では、それぞれ、モデル1の最初の奨学金借入総額を、現在の奨学金借入残額、奨学金返済の家計負担感の重さにおきかえて調整した。各モデルでは、奨学金要因と幸福度との関連が社会経済的要因と独立したうえで有意にみられるかを分析するため、社会経済的要因である世帯年収、教育、雇用状態を、奨学金要因と同時に調整した。また、奨学金返済負担感のロジット分析では、人口統計的要因(性別、年齢、婚姻状況)、社会経済的要因(世帯年収、教育、雇用形態)を調整した。すべての統計分析において、

SPSS24.0を用いた。

3 分析結果

(1) 記述統計量

表3は、アンケート回答者の記述統計量を示したものである。サンプル数は、3,000である。平均年齢は、40.7歳(SD=10.4)である。性別は、男性は50.8%、女性は49.2%である。幸福度は、「非常に幸せである」「やや幸せである」「あまり幸せではない」「全く幸せではない」は、それぞれ、14.8%、53.7%、23.4%、8.1%である。奨学金要因は、奨学金借入者(N=573)のうち、学生のときに日本学生支援機構(または日本育英会)の奨学金を利用したことで、学校の勉強、サークル・部活動・課外活動、就職活動により多く

専念できたという割合は、いずれも半数程度または半数を超えている。奨学金借入者（N=573）のうち、奨学金の返済は、家計の経済的負担からみてどのような状況かについては、非常に重いは27.9%、やや重いは39.3%、あまり重くないは19.7%、まったく重くないは13.1%である。

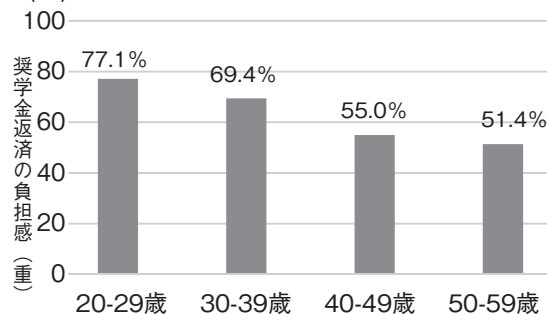
(2) 婚姻状況・世帯年収・雇用形態と奨学金返済負担感

奨学金返済の家計負担感の重さについてのクロス集計およびロジット推定結果については、奨学金を借りているあるいは借りていたサンプル群のみを対象に分析している。図1～図4は、日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金の返済負担感に関するクロス集計結果であり、日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金について、「非常に重い」または「やや重い」を合計した割合を示している。

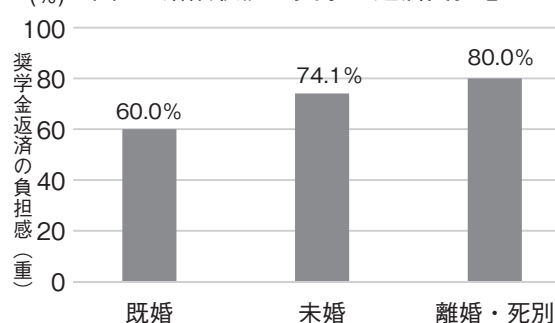
図1は、年齢と奨学金返済負担感であり、奨学金返済負担感が重いのは、20～29歳は77.1%、30～39歳は69.4%、40～49歳は55.0%、50～59歳は51.4%である。図2は、婚姻状況と奨学金返済負担感である。既婚の場合は60.0%、未婚の場合は74.1%、離別・死別の場合は80.0%が、返済負担感が重いと回答している。図3は、世帯年収と奨学金返済負担感、図4は、雇用形態と奨学金返済負担感である。若年世代、離婚・死別、低年収、非正規雇用の特徴をもつ場合、奨学金返済の負担感が重いと回答している割合が高い。

奨学金返済の家計負担感の重さについてのロジット推定結果については、表4に示している。奨学金返済負担感が重い確率は、女性を基準とした場合、男性は1.59倍となる。男性は女性よりも奨学金返済負担感が重い。年齢は、50代を基準にした場合、返済負担感が重い確率は、20

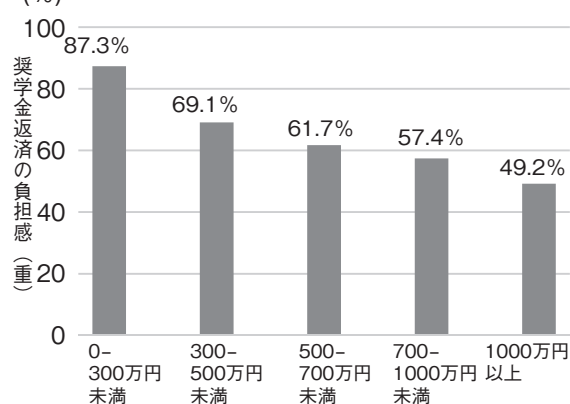
(%) 図1 年齢と奨学金返済負担感



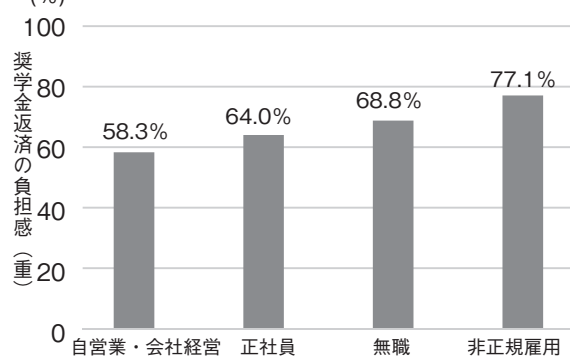
(%) 図2 婚姻状況と奨学金返済負担感



(%) 図3 世帯年収と奨学金返済負担感



(%) 図4 雇用形態と奨学金返済負担感



(注) 図1～図4のサンプル数N=573、奨学金を借りていた人々のみ。奨学金返済の負担感(重)は、「非常に重い」と「やや重い」の回答を合計した割合。

表4 奨学金返済の負担感に関するロジット推定結果 (N=573、奨学金借入者のみのサンプル)

	オッズ比	95%信頼区間
性別		
男性	1.59**	(1.01, 2.49)
女性	ref	
年齢		
20-29 歳	2.44***	(1.28, 4.63)
30-39 歳	2.18**	(1.19, 4.00)
40-49 歳	0.97	(0.52, 1.81)
50-59 歳	ref	
婚姻状況		
既婚	ref	
未婚	1.19	(0.77, 1.86)
離婚・死別	2.74*	(0.84, 9.00)
世帯年収		
300 万円未満	3.91***	(2.04, 7.51)
300-500 万円未満	1.35	(0.88, 2.09)
500 万円以上	ref	
教育		
中学校・高校卒	ref	
専修専門学校・高専・短大卒	1.18	(0.57, 2.44)
大学・大学院卒	1.09	(0.58, 2.05)
雇用形態		
正社員	ref	
非正規雇用	1.65*	(0.93, 2.94)
自営業・会社経営	0.55	(0.22, 1.39)
無職	1.26	(0.71, 2.24)
定数項	0.50	

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1。

代は2.44倍、30代は2.18倍、40代は0.97倍である。婚姻状況は、既婚を基準にした場合、奨学金返済負担感が重い確率は、未婚は1.19倍、離婚・死別は2.74倍である。

第2に、社会経済的要因については、世帯年収は、500万円以上を基準にした場合、奨学金返済負担感が重い確率は、300万円未満は3.91倍、300～500万円未満は1.35倍である。教育は、中学校・高校卒を基準にした場合、専修専門学校・高専・短大卒は1.18倍、大学・大学院卒は1.09倍である。雇用形態は、正社員を基準にした場合、非正規雇用・パートは1.65倍、自営業・会社経営は0.55倍、無職は1.26倍である。

(3) 奨学金と幸福度の関連

図5～図7は、奨学金要因と幸福度に関するク

ロス集計結果である。幸福者の割合は、「非常に幸せである」+「やや幸せである」の割合である。日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金について、奨学金の借入総額が大きくなっても、幸福度が高い傾向はあまりみられない。奨学金の返済負担感が重い場合は、幸福度は低い傾向がある。奨学金を利用したことで学校の勉強、サークル・部活動・課外活動、就職活動

図5 奨学金借入総額(当初)と幸福度

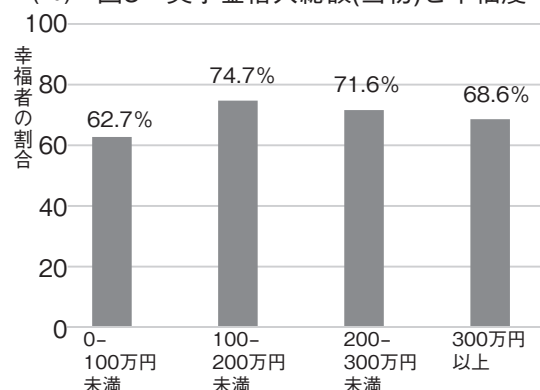


図6 奨学金返済負担感と幸福度

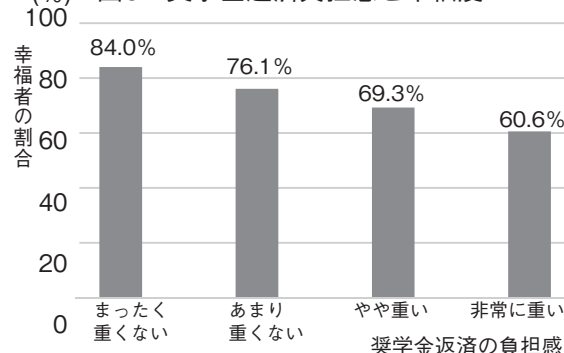
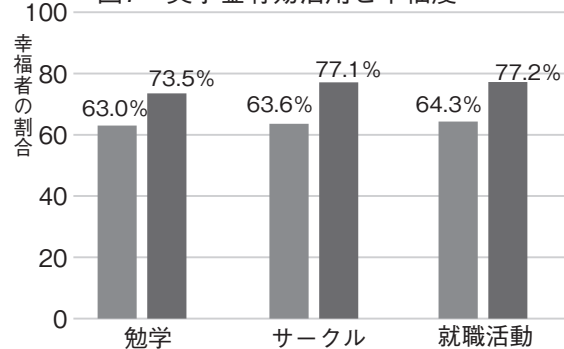


図7 奨学金有効活用と幸福度



*奨学金利用で、
左：専念できなかった、右：専念できた。

(注) 図5～図7は、サンプル数N=573、奨学金を借りていた人々573人のみ。幸福者の割合は、「非常に幸せである」+「やや幸せである」の割合である。

表5 幸福度に関するロジット推定結果 (N=3,000: 奨学金の借入者+非借入者の全体サンプル)

	モデル 1		モデル 2		モデル 3	
	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間
性別						
男性	0.55***	(0.45, 0.67)	0.55***	(0.45, 0.67)	0.56***	(0.46, 0.68)
女性	ref		ref		ref	
年齢						
20-29 歳	ref		ref		ref	
30-39 歳	0.77**	(0.59, 0.99)	0.78*	(0.60, 1.01)	0.75**	(0.58, 0.97)
40-49 歳	0.61***	(0.47, 0.78)	0.62***	(0.48, 0.80)	0.58***	(0.45, 0.76)
50-59 歳	0.51***	(0.38, 0.67)	0.52***	(0.39, 0.69)	0.49***	(0.37, 0.64)
婚姻状況						
既婚	ref		ref		ref	
未婚	0.29***	(0.24, 0.36)	0.29***	(0.24, 0.36)	0.29***	(0.24, 0.35)
離婚・死別	0.44***	(0.32, 0.62)	0.44***	(0.32, 0.62)	0.44***	(0.31, 0.61)
世帯年収						
300 万円未満	ref		ref		ref	
300-500 万円未満	1.47***	(1.16, 1.86)	1.47***	(1.16, 1.86)	1.45***	(1.15, 1.84)
500-700 万円未満	1.64***	(1.26, 2.14)	1.64***	(1.26, 2.13)	1.60***	(1.23, 2.09)
700-1000 万円未満	2.42***	(1.82, 3.23)	2.43***	(1.82, 3.25)	2.36***	(1.77, 3.16)
1000 万円以上	3.02***	(2.12, 4.31)	3.03***	(2.12, 4.32)	2.92***	(2.04, 4.16)
教育						
中学校・高校卒	ref		ref		ref	
専修専門学校・高専・短大卒	1.09	(0.87, 1.37)	1.09	(0.87, 1.37)	1.10	(0.88, 1.39)
大学・大学院卒	1.12	(0.91, 1.38)	1.12	(0.91, 1.38)	1.13	(0.91, 1.39)
雇用形態						
正社員	ref		ref		ref	
非正規雇用・パート	0.83	(0.66, 1.05)	0.84	(0.66, 1.06)	0.85	(0.67, 1.07)
自営業・会社経営	0.98	(0.71, 1.34)	0.99	(0.72, 1.35)	0.98	(0.72, 1.34)
無職	0.75**	(0.59, 0.97)	0.76**	(0.59, 0.97)	0.76**	(0.59, 0.98)
奨学金の最初の借入総額						
100 万円未満	ref					
100 ～ 200 万円未満	1.50	(0.83, 2.69)				
200 ～ 300 万円未満	1.21	(0.68, 2.16)				
300 万円以上	1.05	(0.58, 1.90)				
非借入者	1.65*	(0.98, 2.79)				
奨学金の現在の借入残額						
100 万円未満			ref			
100 ～ 200 万円未満			1.44	(0.76, 2.73)		
200 ～ 300 万円未満			0.99	(0.51, 1.91)		
300 万円以上			1.04	(0.51, 2.11)		
非借入者			1.43*	(0.99, 2.08)		
奨学金返済の家計負担感の重さ						
まったく重くない					ref	
あまり重くない					0.60	(0.27, 1.35)
やや重い					0.54*	(0.26, 1.12)
非常に重い					0.37***	(0.17, 0.78)
非借入者					0.72	(0.35, 1.47)
奨学金のメリット (勉学専念)						
専念できた	1.32	(0.83, 2.11)	1.30	(0.82, 2.07)	1.30	(0.81, 2.08)
専念できなかった+非借入者	ref		ref		ref	
奨学金のメリット (部活専念)						
専念できた	1.31	(0.82, 2.07)	1.36	(0.85, 2.15)	1.27	(0.79, 2.02)
専念できなかった+非借入者	ref		ref		ref	
奨学金のメリット (就職活動)						
専念できた	1.43	(0.88, 2.32)	1.39	(0.86, 2.24)	1.45	(0.89, 2.36)
専念できなかった+非借入者	ref		ref		ref	
定数項	2.82***		3.19***		6.72***	

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1。

(注) モデル 1 では、人口統計的要因 (性別、年齢、婚姻状況)、社会経済的要因 (世帯年収、教育、雇用形態)、奨学金メリット (勉学、部活動等、就職活動に専念できた)、「奨学金の最初の借入総額」を調整した。モデル 2 では、モデル 1 の「奨学金の最初の借入総額」を「奨学金の現在の借入残額」に、モデル 3 ではモデル 1 の「奨学金の最初の借入総額」を「奨学金返済の家計負担感の重さ」に、それぞれおきかえて調整した。

表6 幸福度に関するロジット推定結果 (N=573: 奨学金の借入者のみのサンプル)

	モデル 1		モデル 2		モデル 3	
	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間	オッズ比	95%信頼区間
性別						
男性	0.43***	(0.27, 0.70)	0.44***	(0.27, 0.71)	0.45***	(0.28, 0.74)
女性	ref		ref		ref	
年齢						
20-29 歳	ref		ref		ref	
30-39 歳	0.88	(0.50, 1.55)	0.92	(0.51, 1.65)	0.82	(0.46, 1.46)
40-49 歳	0.37***	(0.20, 0.67)	0.41***	(0.21, 0.77)	0.31***	(0.17, 0.58)
50-59 歳	0.27***	(0.12, 0.60)	0.29***	(0.13, 0.66)	0.22***	(0.10, 0.49)
婚姻状況						
既婚	ref		ref		ref	
未婚	0.13***	(0.08, 0.22)	0.13***	(0.08, 0.23)	0.12***	(0.07, 0.21)
離婚・死別	0.12***	(0.04, 0.36)	0.12***	(0.04, 0.36)	0.12***	(0.04, 0.36)
世帯年収						
300 万円未満	ref		ref		ref	
300-500 万円未満	1.20	(0.68, 2.09)	1.21	(0.69, 2.11)	1.13	(0.64, 2.00)
500-700 万円未満	1.16	(0.59, 2.27)	1.15	(0.59, 2.26)	1.01	(0.51, 2.00)
700-1000 万円未満	2.36**	(1.13, 4.91)	2.42**	(1.16, 5.05)	1.96*	(0.92, 4.16)
1000 万円以上	3.42**	(1.32, 8.87)	3.42**	(1.31, 8.88)	2.76**	(1.04, 7.29)
教育						
中学校・高校卒	ref		ref		ref	
専修専門学校・高専・短大卒	0.65	(0.29, 1.43)	0.64	(0.30, 1.40)	0.69	(0.32, 1.50)
大学・大学院卒	0.82	(0.41, 1.66)	0.79	(0.41, 1.53)	0.84	(0.44, 1.61)
雇用形態						
正社員	ref		ref		ref	
非正規雇用・パート	1.02	(0.58, 1.80)	1.06	(0.60, 1.86)	1.08	(0.61, 1.90)
自営業・会社経営	3.86**	(1.18, 12.70)	4.15**	(1.26, 13.65)	3.66**	(1.11, 12.03)
無職	0.38***	(0.20, 0.73)	0.39***	(0.21, 0.75)	0.41***	(0.21, 0.79)
奨学金の最初の借入総額						
100 万円未満	ref					
100 ～ 200 万円未満	1.30	(0.67, 2.50)				
200 ～ 300 万円未満	1.10	(0.56, 2.15)				
300 万円以上	0.87	(0.43, 1.74)				
奨学金の現在の借入残額						
100 万円未満			ref			
100 ～ 200 万円未満			1.46	(0.71, 2.98)		
200 ～ 300 万円未満			0.96	(0.47, 1.99)		
300 万円以上			1.02	(0.46, 2.22)		
奨学金返済の家計負担感の重さ						
まったく重くない					ref	
あまり重くない					0.52	(0.22, 1.22)
やや重い					0.48*	(0.22, 1.05)
非常に重い					0.30***	(0.13, 0.67)
奨学金のメリット (勉学専念)						
専念できた	1.45	(0.87, 2.43)	1.40	(0.84, 2.34)	1.43	(0.85, 2.40)
専念できなかった	ref		ref		ref	
奨学金のメリット (部活専念)						
専念できた	1.25	(0.76, 2.05)	1.30	(0.79, 2.14)	1.24	(0.75, 2.06)
専念できなかった	ref		ref		ref	
奨学金のメリット (就職活動)						
専念できた	1.51	(0.90, 2.53)	1.48	(0.89, 2.46)	1.15	(0.90, 2.55)
専念できなかった	ref		ref		ref	
定数項	10.73***		10.57***		28.48***	

***p<0.01, **p<0.05, *p<0.1。

(注) モデル 1 では、人口統計的要因 (性別、年齢、婚姻状況)、社会経済的要因 (世帯年収、教育、雇用形態)、奨学金メリット (勉学、部活動等、就職活動に専念できた)、「奨学金の最初の借入総額」を調整した。モデル 2 では、モデル 1 の「奨学金の最初の借入総額」を「奨学金の現在の借入残額」に、モデル 3 ではモデル 1 の「奨学金の最初の借入総額」を「奨学金返済の家計負担感の重さ」に、それぞれおきかえて調整した。

により多く専念できた場合は、幸福度が高い傾向がある。

表5は、奨学金の借入者と非借入者の全体を含めた3,000サンプルの幸福度に関するロジット推定結果を示している。また、表6は、奨学金借入者のみの573サンプルの幸福度に関するロジット推定結果を示している。オッズ比が1より大きい場合は、当該説明変数は、幸福度が高い関連があることを示している。また、オッズ比が1より小さい場合は、当該説明変数は、幸福度が低い関連があることを示している。

まず、奨学金の借入者と非借入者の全体を含めた3,000サンプルの幸福度に関するロジット推定結果について、第1に、人口統計学的要因については、幸福度が高い確率は、女性を基準とした場合、男性は0.56倍となる。男性は女性よりも幸福度が低い。年齢については、20代を基準にした場合、幸福度が高い確率は、30代は0.75倍、40代は0.58倍、50代は0.49倍となる。婚姻状況は、既婚を基準にした場合、幸福度が高い確率は、未婚は0.29倍、離婚・死別は0.44倍である。

第2に、社会経済的要因については、世帯年収は、0円～300万円未満を基準にした場合、幸福度が高い確率は、300～500万円未満は1.45倍、500～700万円未満は1.60倍、700～1,000万円未満は2.36倍、1,000万円以上は2.92倍である。教育は、中学・高校卒を基準にした場合、専修専門学校・高専・短大卒は1.10倍、大学・大学院卒は1.13倍である。雇用形態は、正社員を基準にした場合、非正規雇用・パートは0.85倍、自営業・会社経営は0.98倍、無職は0.76倍である。

第3に、奨学金要因については、学生のときに日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金を利用したことで、「勉学」「サークル・部活動・課外活動」「就職活動」により多く専念で

きたかどうかについては、専念できなかった＋非借入者を基準にすると、専念できた場合は、それぞれ、1.30倍、1.27倍、1.45倍である。奨学金の返済は家計の経済的負担からみてどうかについては、まったく重くないを基準にした場合、あまり重くないは0.60倍、やや重いは0.54倍、非常に重いは0.37倍である。

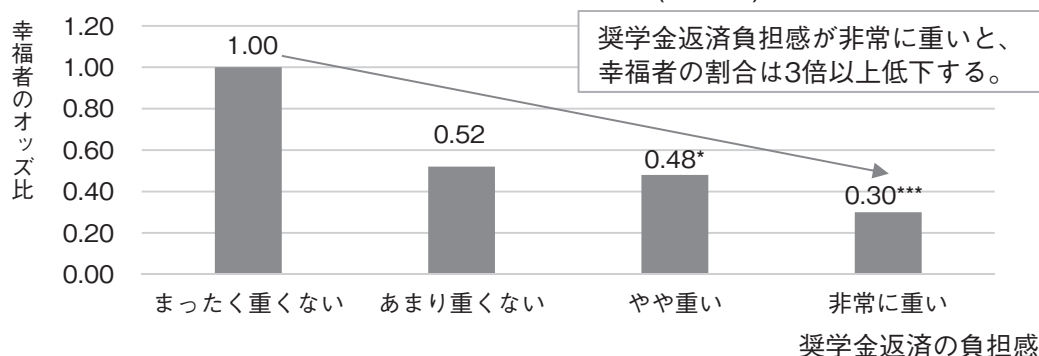
次に、表6の奨学金借入者のみの573サンプルの幸福度に関するロジット推定結果は、奨学金要因を中心にみると、学生のときに日本学生支援機構（または日本育英会）の奨学金を利用したことで、「勉学」「サークル・部活動・課外活動」「就職活動」により多く専念できたかどうかは、専念できなかった＋非借入者を基準にすると、専念できた場合は、それぞれ、1.43倍、1.24倍、1.15倍である。奨学金の返済は家計の経済的負担からみてどうかは、まったく重くないを基準にすると、あまり重くない0.52倍、やや重い0.48倍、非常に重い0.30倍である。

4 ディスカッション

本研究では、日本全国の20～59歳の男女3,000サンプルを用いた分析の結果、在学時に勉学面、部活動等面、就職活動面で奨学金を有効活用できた場合は統計的に有意ではないものの幸福度が高い傾向があること、奨学金返済の家計経済負担を非常に重く感じる場合は幸福度は統計的に有意に低い関連があることを明らかにした。

これまでの先行研究では、借金や奨学金借入等の負債のマイナス面に焦点を当て、負債は幸福度に対して負の影響を及ぼしていることを明らかにしている（Louis Tay et al[2017]、Ming-Chang Tsai et al[2016]）。一方、在学中に奨学金をどう有効活用したかなど、奨学金の有効活用が幸福度にどのようなプラス効果を与えているのかに焦点を当てた先行研究は、非常に少な

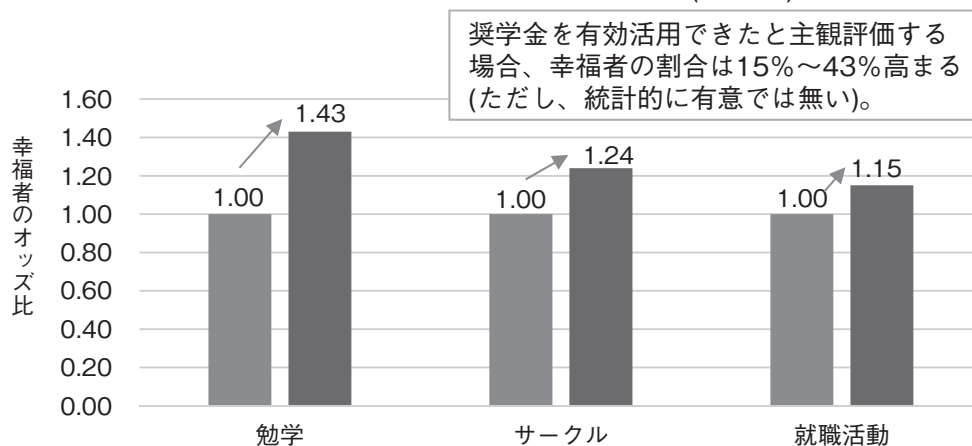
図8 奨学金返済負担感と幸福度の関連(N=573)



※人口統計的要因(性別、年齢、婚姻状況)、社会経済的要因(世帯年収、教育、雇用形態)、奨学金メリット(勉学、部活動等、就職活動が専念できた)を調整したうえで、ロジット分析を行った。

***、*はそれぞれ、1%水準、10%水準で統計的に有意な関連があったことを示している。

図9 奨学金有効活用と幸福度の関連(N=573)



※奨学金利用で。左：専念できなかった場合、右：専念できた場合。

※人口統計的要因(性別、年齢、婚姻状況)、社会経済的要因(世帯年収、教育、雇用形態)、奨学金メリット(勉学、部活動等、就職活動が専念できた)を調整したうえで、ロジット分析を行った。いずれも、統計的に有意な関連はみられなかった。

い。本研究では、奨学金を利用したことで、「学校」「サークル・部活動・課外活動」「就職活動」により多く専念できた場合、統計的に有意ではないものの、幸福度が高い傾向があることを明らかにした。

なお、在学時に奨学金を有効活用できたかどうかは、個々人の資質やタイプの違いによるものであるのか、それとも、奨学金のリテラシー教育などで有効活用度を高めていけるものであるのかを識別することは、奨学金の有効活用のありかたを考える上で、重要な点である。奨学

金も負債・金融の1つであり、家森 ([2017],[2016]) による金融リテラシーに関する先駆的な研究を参考にすると、学生に限らず社会人一般にとっても、そもそも金融や奨学金の仕組みを理解することは難しい。わが国では、中学・高校等の学校教育現場で金融や奨学金の仕組みや機能を学ぶ体系的な金融リテラシー教育はほとんど行われておらず、金融知識が十分ではないまま、金融や奨学金借入の諸決定を行う面があることも考えられる。奨学金リテラシー教育の枠組みについて、どのような仕組みをつくれば奨学金

の有効活用度は高まるのかを分析することが重要と考えられる。

次に、本研究は、金額面でみた奨学金の借入金額の大小は幸福度との関連はないこと、むしろ、心理的にみた奨学金の返済負担感が大きいほど幸福度が低い関連があることを明らかにした。金額面でみた奨学金の借入金額と幸福度との関連は、反映されにくいことが示された。奨学金の借入金額が大きくても、返済力があれば、幸福度への負の影響は小さいだろう。むしろ、返済の負担感からアプローチすることで、奨学金借入が幸福度に及ぼす負の実態が反映されやすいことが示された。その理由は、Sweet et al.[2013]が参考になる。負債が大きい場合は、個々人の所得や資産も大きいことがあり、負債の絶対額をみただけでは、正味の負債の実態は垂反映されにくいからである。

本研究の限界点は、2点ある。第1は、使用サンプル全体は3,000であるが、奨学金利用者のサンプルは573であり、奨学金滞納や免除・猶予のケースは非常に少なく、これらのケースが幸福度に及ぼす効果を分析することが難しかった点である。今後は、奨学金利用者に限定した調査を実施して、奨学金滞納や免除・猶予のケースのサンプル数を十分に確保した分析を行なうことが重要であると考えられる。第2は、奨学金の有効活用の質問項目について、勉学、部活動等、就職活動に専念できたかどうかを説明変数にしているが、いずれも本人の主観評価に基づく変数となっている。より客観的な尺度を用いるため、費やした実際の時間や成績・成果状況などの数値を用いた分析を行う必要がある。

5 まとめ

奨学金返済の家計経済負担を重く感じる場合、幸福度は統計的に有意に低い関連があることが

明らかになった。また、奨学金が有効活用され、在学時に勉学、サークル等、就職活動に専念できた場合、統計的には有意ではないものの、幸福度が高い傾向があることが明らかになった。今後は、幸福度を高める点からも、奨学金をどの主体にいくら配分するのかわけではなく、奨学金の有効活用を促すため、奨学金の有効活用の具体例などをレクチャーする奨学金リテラシー教育の推進も重要であると考えられる。

【謝辞】

本研究はJSPS 科研費 JP15K03982 の助成を受けたものです。

【参考文献】

- 小林雅之（2012）『教育機会均等への挑戦（授業料と奨学金の8カ国比較）』，東信堂。
- 近藤克則（2017）『健康格差社会への処方箋』，医学書院。
- 近藤尚己（2016）『健康格差対策の進め方：効果をもたらす5つの視点』，医学書院。
- 島一則（2011）『大学とマネー（経済と財政）』，玉川大学出版部。
- 総務省（2017）「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（平成29年1月1日現在）」。
- 全国大学生生活協同組合連合会，2016，「奨学金制度に関するアンケート」。
- 日本学生支援機構（2015）「平成27年度奨学金の返還者に関する属性調査結果」。
- 日本学生支援機構（2013）「平成25年度奨学金の延滞者に関する属性調査結果」。
- 文部科学省（2016）「平成28年度学校基本調査」。
- 家森信善（2017）「わが国の生活者の金融・保険リテラシーと保険加入行動－2016年・生活保障に関する調査をもとに－」『生命保険論集：金融・保険リテラシー特別号』 pp.37-73。
- 家森信善（2016）「多様化する金融チャネルと金融リテラシー—生命保険の加入チャネルの観点から

- 分析」『個人金融』(2016年冬号) pp.52-60。
- Blanchflower, D. G., & Oswald, A. J. (2004). Well-being over time in Britain and the USA. *Journal of public economics*, 88 (7), 1359-1386.
- Diener, E., Wirtz, D., Tov, W., Kim-Prieto, C., Choi, D. W., Oishi, S., Biswas-Diener, R. (2010). New Well-being Measures: Short Scales to Assess Flourishing and Positive and Negative Feelings. *Social Indicators Research*, 97 (2) :143 -156.
- Ergin, I., & Mandiracioglu, A. (2015). Demographic and socioeconomic inequalities for self-rated health and happiness in elderly: The situation for Turkey regarding World Values Survey between 1990 and 2013. *Archives of gerontology and geriatrics*, 61 (2), 224-230.
- Hojman, D. A., Miranda, Á., & Ruiz-Tagle, J. (2016). Debt trajectories and mental health. *Social Science & Medicine*, 167, 54-62.
- Krueger, A. B., Schkade, D. A. (2008). The reliability of subjective well-being measures. *Journal of Public Economics*, 92 (8) :1833-1845.
- Kye, S. Y., & Park, K. (2014). Health-related determinants of happiness in Korean adults. *International journal of public health*, 59 (5), 731-738.
- Lawrence EM, Rogers RG, and Wadsworth T. (2015). Happiness and longevity in the United States., *Social Science and Medicine*, 145, 115-119.
- Lee, Y., Hofferth, S. L., Flood, S. M., Fisher, K. (2016). Reliability, Validity, and Variability of the Subjective Well-Being Questions in the 2010 American Time Use Survey. *Social indicators research*, 126 (3) :1355 -1373.
- Oshio, T., & Urakawa, K. (2014). The association between perceived income inequality and subjective well-being: Evidence from a *social survey in Japan*. *Social Indicators Research*, 116 (3), 755-770.
- Sun, S., Chen, J., Johannesson, M., Kind, P., & Burström, K. (2016). Subjective well-being and its association with subjective health status, age, sex, region, and socio-economic characteristics in a Chinese population study. *Journal of Happiness Studies*, 17 (2), 833-873.
- Sweet, E., Nandi, A., Adam, E. K., & McDade, T. W. (2013). The high price of debt: Household financial debt and its impact on mental and physical health. *Social Science & Medicine*, 91, 94-100.
- Tsai, M. C., Dwyer, R. E., & Tsay, R. M. (2016). Does financial assistance really assist? The impact of debt on wellbeing, health behavior and self-concept in Taiwan. *Social Indicators Research*, 125 (1), 127-147.
- Tay, L., Batz, C., Parrigon, S., & Kuykendall, L. (2017). Debt and Subjective Well-being: The Other Side of the Income-Happiness Coin. *Journal of Happiness Studies*, 18 (3), 903-937.
- Walsemann, K. M., Gee, G. C., & Gentile, D. (2015). Sick of our loans: Student borrowing and the mental health of young adults in the United States. *Social Science & Medicine*, 124, 85-93.
- Zhou, Y., Zhou, L., Fu, C., Wang, Y., Liu, Q., Wu, H., ... & Zheng, L. (2015). Socio-economic factors related with the subjective well-being of the rural elderly people living *independently in China*. *International journal for equity in health*, 14 (1), 5.

ささき いちろう

同志社大学商学部准教授

神戸大学大学院経営学研究科 博士課程修了。博士（経営学）。

広島経済大学経済学部専任講師、同准教授を経て、2008年より現職。

専門分野：年金論、経営学、マーケティング、AI・ロボアドバイザー。

【著書】

『年金未納問題と年金教育』日本評論社、219ページ、2012年。

【論文】

「年金リテラシーと金融クイズ」『生命保険論集』第201号、pp.111-131、2017年12月

「格差社会における共済・保険への加入と幸福度」『全労済協会：委託研究報告書（公募研究シリーズ67）、17ページ、2017年5月

「老後準備と年金教育・年金クイズ」『年金と経済』第35巻第1号、pp.12-19、2016年4月

「自動車保険の知識量と未加入行動」『損害保険研究』第78巻第1号、pp.113-134、2016年5月

「年金未納と公共料金滞納行動」『日本年金学会誌』第34号、pp.18-27、2015年4月
